

## L08a 流星電波観測による2001年しし座流星群のピーク構造

小川宏 (筑波大自然)、豊増伸治 (みさと天文台)、大西浩次 (長野高専)、網倉忍 (筑波大情報)、  
宮尾佳世 (旭丘高校)、前川公男 (福井高専)

2001年11月、アメリカと東アジア、オセアニアでしし座流星群の大出現観測された。眼視計数観測やビデオ観測などから、極大時刻付近のピーク構造は明らかになってきているが、薄明後の活動については、世界的にも資料が少ない。そこで、昼夜関係なく、天候にも左右されない流星電波観測の結果は大変重要なものである。本研究では、世界15カ国91地点の参加があった「2001年しし座流星群電波観測プロジェクト」の結果を使用し、ピーク構造を詳細に調べた。流星エコー数のカウントは多くのロングエコーによって不可能となっているため、エコー継続時間によって解析を行った。その結果、アジアで観測されているメインピークは大きく分けて2つに分類され、ひとつは、18日18:20(UT)頃であり、これは広く報告されている主極大である。もうひとつは18日21:30(UT)頃で、先ほどのピークに比べると、規模は若干小さいが明瞭なピークである。この極大は予報ではなされていなかった未知のピークである。一方、火球相当の流星はメインピーク時に増えている傾向は認められなかった。このように、しし座流星群の極大付近でのふるまいはたいへん複雑であることがわかった。この他、日本時間で16日未明、18日早朝にも通常に比べると活発な活動が捕らえられており、これらも含めて、本研究ではしし座流星群の極大構造の解明を試みた。